

選択肢を増やすということ
～インドネシア・カラキジョ地区のまちづくり～

立命館大学国際部国際協力学生実行委員会

目次

1. 団体紹介
2. 活動理念
3. 活動内容概要
4. CheRits の強み
5. 活動紹介（インドネシア）
6. 活動紹介（国内）
7. 今後の展望
8. まとめ

選択肢を増やすということ

インドネシア・カラキジョ地区のまちづくり

立命館大学国際部国際協力学生実行委員会

1. 団体紹介

立命館大学国際部国際協力学生実行委員会（愛称：CheRits¹、以下 CheRits）は2004年12月に発生したスマトラ沖地震及びインド洋大津波を契機として設立された団体である。学校法人立命館が深刻な被害を受けたスリランカの被災地を対象に教育再生を目標とする「学校再建支援事業」を開始したのを受け、共感した有志の学生によって結成されたのが、前身である立命館インド洋大津波災害復興支援事業「学校再建プロジェクト」学生実行委員会である。

さらに、立命館はジャワ島中部地震（2006年5月）で被災したインドネシア・ジョグジャカルタ特別州バントウル県の村落（以下、カラキジョ地区）においても小学校（以下、ムハマディヤ小学校）の再建支援を実施した（2007年3月に完成）。これに呼応して学生実行委員会も再建されたムハマディヤ小学校・カラキジョ地区に対する支援

活動を開始し、団体名を立命館大学国際部国際協力学生実行委員会と改め、現在は、カラキジョ地区での継続的な支援活動を中心としている。



ムハマディヤ小学校



小学校エントランス



再建記念碑

2. 活動理念

1.カラキジョ地区の子ども・学校の先生・住民に新しい知識をつけてもらい、彼らの未来の選択肢を増やすこと、2.そのためにカラキジョ地区に定期的に足を運び、現地の文化・生活習慣にそぐう企画をおこなうこと、3.団体の活動紹介を通し、より多くの日本人が「国際協力」という視点を持ち行動を起こすきっかけを提供すること、

¹ CheRits: 2008年4月に団体の愛称として「CheRits」と定めた。この由来はインドネシア語で、C...Cari（さがす）、h...hangat（あたたかい）、e...enak（たのしい）である。Ritsは「立命館」の意。

という3点を中心に、より多くの人が笑顔・勇気・希望を共有し合えるような国際社会の実現を目指す。

3. 活動内容概要

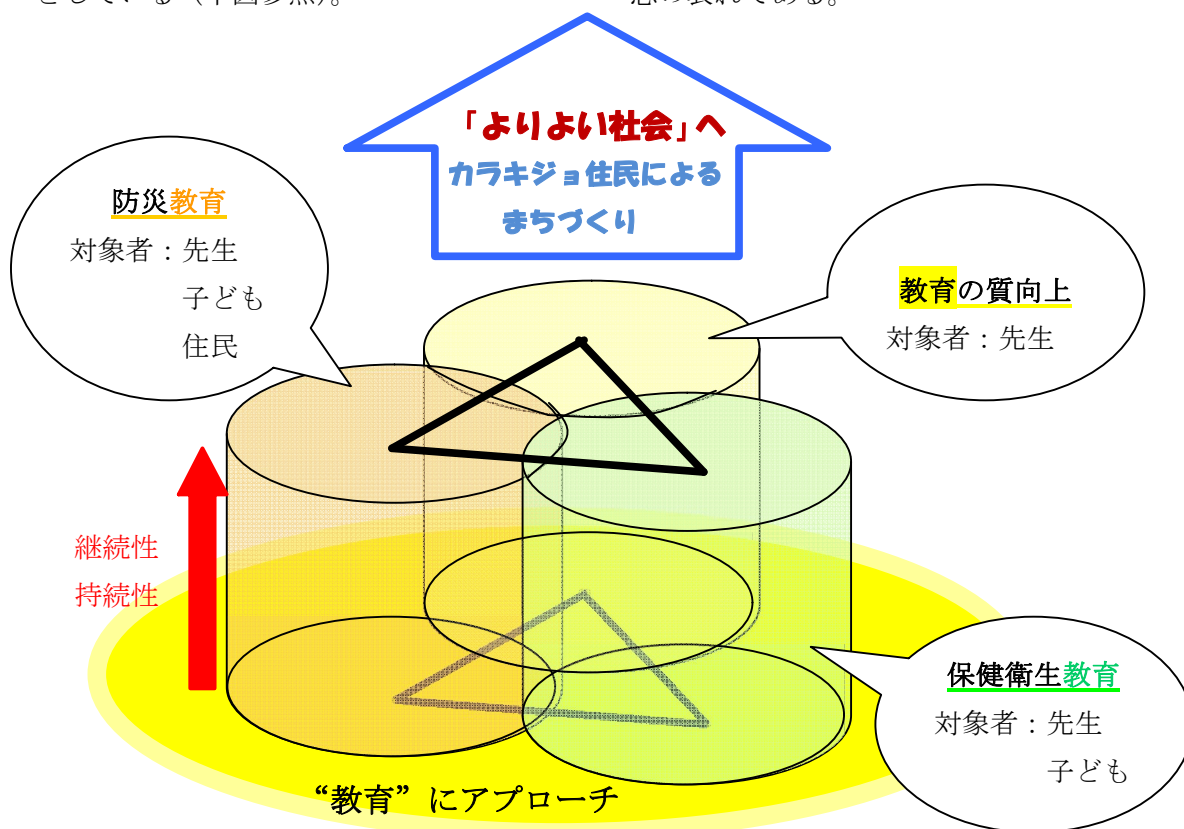
①カラキジョ地区での活動

学校法人立命館が再建したカラキジョ地区のムハマディヤ小学校を拠点に、その地区のまちづくりに寄与する活動を継続的にやっている。

活動内容の基本テーマは“教育”である。

1.ムハマディヤ小学校の先生に教育の質を向上するための企画、2.先生と子ども、およびカラキジョ住民(特に地区リーダー層)に防災の知識・意識をつけてもらうための企画、3.先生と子どもに保健衛生の知識・意識をつけてもらうための企画、を3本柱としている(下図参照)。

われわれの活動の対象者の中心が先生や子どもであるのは、活動拠点が小学校という理由からだけではない。子どもはこれからカラキジョ地区の社会の中心を担う存在であり、彼らの知識を増やし今後の選択肢を増やしてもらうことは、「よりよい社会」を築く上で重要だと考えるからである。また、先生はそういう子どもたちに継続的に教育を行う存在であり、先生の知識の充実および教育手法のバリエーションを増やすことは、子どもたちの知識を増やし今後の選択肢を増やしてもらうために不可欠である。加えて、先生というアクターを通して、われわれが直接アプローチしている子どもだけでなく、将来の小学生に対しても防災や保健衛生の知識を伝えていくという持続性が期待できる。これは「将来的にカラキジョ地区住民が自らの力で自らのまちづくりをおこなう」という CheRits の理念の表れである。



②国内での活動

学内および学外イベントに積極的に参加し、われわれの活動紹介を行うと同時に、他団体との交流・協力を軸としたネットワーク構築を心がけ、活動の質向上に努めている。また、国際理解教育として京都市内の小中学校に赴き、われわれの活動を紹介すると同時に**身近でできる国際協力**を考えてもらっている。



4. CheRits の強み

①立命館大学との連携

大学の取り組みに呼応する形で設立された CheRits は、立命館大学国際部国際協力事業課と連携しながら活動をつづけている。例えば、大学が有する現地ネットワークの活用や情報提供、教員による団体運営・活動内容へのアドバイスを受ける一方、メディアに対する積極的な広報を通じて、立命館が展開する国際協力に貢献している。

②ガジャマダ大学とのパートナーシップ

現地活動当初よりインドネシアのガジャマダ大学社会文化学部日本語学科の学生（通称 UGM）と教員が活動をともしている。UGM 側でも優秀な学生でチ

ームを形成し、現地でのプロジェクトをより良いものにするため、準備段階から頻繁に CheRits メンバーと情報交換や事前調整を行ってきた。両者は共に考え、悩み、協力しあいながら活動が続けている。また、ガジャマダ大学の先生方には、カウンターパートとしてカラキジョ地区の関係者に対する事前調整や現地活動へのサポートをお願いしている。

インドネシアはイスラーム教を主としながらも、ヒンズー教、仏教、キリスト教が混在している。そのように日本とは大きく異なる宗教事情、およびインドネシア（強いてはジャワ島）の生活様式・慣習に対するわれわれの戸惑いは大きいものであるが、UGM の学生は、通訳としてだけでなく、日本人学生と現地との架け橋となってくれている存在であり、われわれの活動は彼らなくしては実現し得ない。

加えていうと、日本にきた経験のないほとんどの UGM の学生にとって、われわれとの交流、および日本語を実践的に用いる機会は彼らにとっても有意義な異文化交流の一端であるようだ。

③定期的な現地活動と信頼構築

CheRits は 2007 年 3 月以降、計 8 回の現地活動をおこなってきた。同地区を定期的に訪問することにより、あらゆる変化（例えば村の様子、小学校の教育状況など）やその時々課題を知ることができる。企画実施前後の地区や人々の変化を把握することで、カラキジョ地区のまちづくりのための今後の活動に活かすことができる。

2009 年夏（第 8 回目）の渡航活動には、経験豊富な 3 年生 5 名、次に CheRits を続

括する 2 回生 3 名、今後の継続的な活動の担い手となる 1 回生 9 名、文系学部生で構成される² CheRits に新たに理系（理工学部）の視点を持ち込んだ大学院修士課程 1 回生 1 名の総勢 18 名³が参加し、過去最多となった。今回多くの 1 回生が参加したことは CheRits の活動の継続と充実につながり、それによってカラキジョ地区発展を促進できうという面で意義の高いことであったと考える。加えて、現在 UGM に留学中の CheRitsOB およびインドネシア研究を続ける CheRitsOB がオブザーバーとして参加し多数の初渡航メンバーのサポートをしたことは、今までの活動を次の代に引き継ぎ、カラキジョ地区のための活動を継続していく上で不可欠であった。また、活動を継続する上で、学生委員会という性質上顧問としてわれわれの活動を始めから支えている教員の存在も大きい。

2009 年 9 月集合写真



われわれがこれほど定期的に現地に赴くことにこだわるのは、われわれのひとりよがりでないカラキジョ地区発展のための活

² CheRits の学内活動場所は立命館大学の京都・衣笠キャンパスにあるが、当キャンパスには法学部・文学部・産業社会学部・国際関係学部・政策科学部・映像学部と主に文系学部が揃っているため、CheRits 構成メンバーは歴代文系学部中心である。

³ 個人の都合で渡航できないメンバーもあり、現在 CheRits は総勢 40 名。渡航しなかったメンバーは他団体との交流やイベント参加などの国内活動で活躍している。

動をする上で、**現地住民との信頼関係**を築くことがなにより重要であるからだ。

CheRits が確実にカラキジョ住民との間に信頼関係を築いてきたことの証として、2009 年夏渡航でのホームステイが挙げられる。前回の渡航で地区リーダーからホームステイの提案を受け実現したものである。

夕食



あるホームステイ先

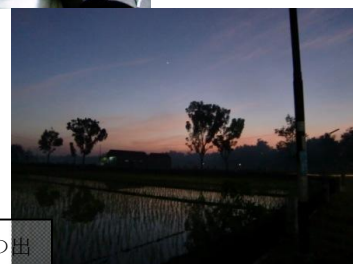


われわれを信頼し私生活の一端を見せてくださったこと、そして初めて夜と早朝のカラキジョ地区の様子を見たことは、CheRits のカラキジョ地区のための活動企画作成において、より現地にそぐう内容を構成するための貴重な情報源となった。先輩の努力を無にしないために、今後もカラキジョ地区発展の一役を担えるように、この信頼関係をより堅くし、信頼を裏切らないような活動を続ける決意を新たにした。

お祈りの前の遊び（夜）



カラキジョの日の出



④きめ細やかな現地のニーズ把握と徹底したフィードバック (Plan-Do-Check-Act)

現地活動中の住民・先生へのインタビュー、および現地活動後の徹底したフィードバックと自己評価により、次回活動に向けた展望をはかっている。そして現地住民のニーズを重視することに軸にしているのである。



UGMとフィードバック

そのために、まずは現地活動時点から企画終了ごとに UGM とフィードバックを行うことから始まる。このようにインドネシア人である UGM 学生の意見を多く聞くこ

とを心掛けている。そこで得られた意見や課題を基に、帰国後さらに深い考察を行なっている。

なお、実施内容とフィードバックの結果は、毎回「現地活動報告書」を作成し、広報活動の資料として、また、外部からの評価をいただく資料として活用し、CheRits

活動の質向上につとめている。



普段の会議の様子

2009年3月報告書



⑤ボランティア精神と社会的評価

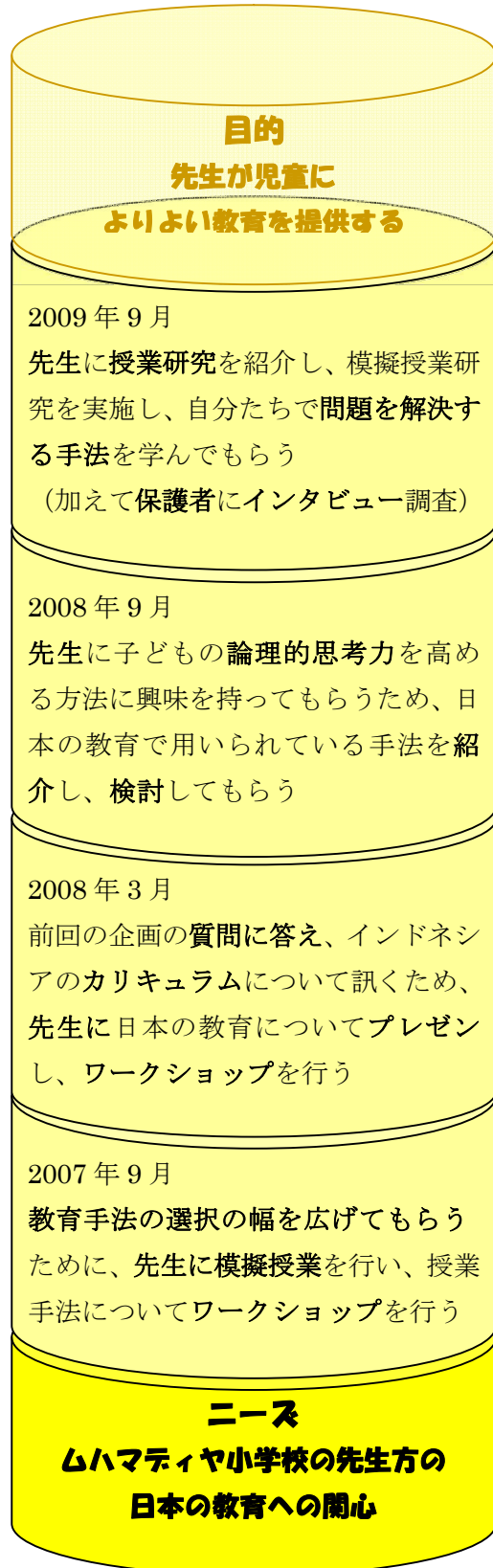
CheRits は活動のさらなる質の向上をはかるために「第8回ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」や学内における課外活動助成など学内外の表彰・助成プログラムに積極的に申請し、外部の評価や提言をいただくようにしている。基本的に学生個人々の自費によるボランティア活動であるが、より良い活動が展開できるようにボランティア精神を大切にしながら、今後も様々な表彰・助成プログラムに申請する。(下表参照)

表彰歴 (2008～2009 年)

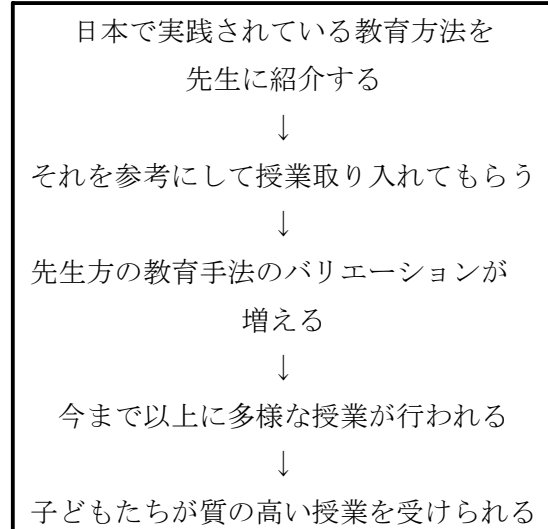
時期	内容	主催
08 年 1 月	1. 17 防災未来賞 (ぼうさい甲子園)「奨励賞」受賞	毎日新聞等
2 月	SYD ボランティア奨励賞「特別賞」受賞	財団法人修養団
2 月	立命館大学課外授業団体助成金「パイオニアチャレンジ賞」受賞	立命館大学
6 月	立命館大学課外自主・活動 研修支援金「チャレンジ出願」採用	立命館大学
5 月～12 月	「日本ーインドネシア友好 50 周年記念事業」に認定	外務省
12 月	第 8 回ソニーマーケティング学生ボランティアファンド助成金採用	ソニーマーケティング株式会社
09 年 1 月	1. 17 防災奨励賞 (ぼうさい甲子園)「奨励賞」受賞	毎日新聞等
3 月	立命館大学課外自主活動団体助成金採用	立命館大学

5. 活動報告（インドネシア）

①教育の質向上企画



CheRits は「ムハマディヤ小学校の先生がカラキジョの児童によりよい教育を提供する」ことを目的にこの企画を行ってきた。この目的を達成するため、以下のようなプロセスを念頭に置いている。



2007年9月の渡航から、教育の質向上企画が始まった。この回では、3日かけて企画を行い、「日本とインドネシアの比較」と



米作り授業

いう視点から、1.日本の米作りの方法を授業し、2.児童とインドネシアの農

家を訪れ児童が用意した質問およびその場での疑問を尋ねるフィールドワークをしたのち、3.わかったことを発表してもらった。そして先生に今回の企画に対する意見を聞いた。先生からは「子どもたちは3日間授業に集中していたし、楽しそうな様子で



フィールドワーク

とても積極的だった」「先生のモチベーションが上がった」という感想をいただいた。



発表

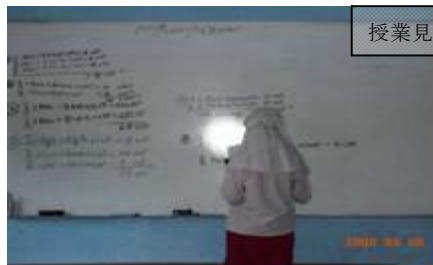
2008年3月の企画では、前回の企画で出た日本の教育に関する質問（「先生はどうやって一年生に基本的なことを教えればいいのか」「自分がどこがわかっていないのかわからない子に対して日本ではどのように対応するのか」「児童にわかりやすい説明はどうやっているのか」「障害がある子も同じようにグループ編成にいれるのか」など）に対して回答すると同時に、日本の先生の「一週間のスケジュール」や「授業の準備」「使用教材」などの例を紹介した。その後のワークショップで、ムハマディヤ小学校の先生の一週間過ごし方について、授業準備について、教材について、先生同士の交流について質問し、先生の実態について調査した。



先生とのワークショップ

2008年9月の企画では、日本で行われて

いる、児童が回答を導く上で理由・根拠を考えられるような**授業手法**（ハンドサインで意思を表現する方法や、答え方の話型を「私は〇〇だと思います。なぜなら△△だからです」のように決めておく方法、5W1Hの項目にわけたワークシートを用いる方法など）についてデモンストレーションを通して紹介し、ワークショップで紹介した授業手法について先生と話し合ってもらった。ここでは「知識をつけるために児童が自ら考えることが重要であることを知ってもらおう」ことを目標とした。また、**CheRits** は**授業見学**も通じて、ムハマディヤ小学校の教育現状を把握することに努めた。

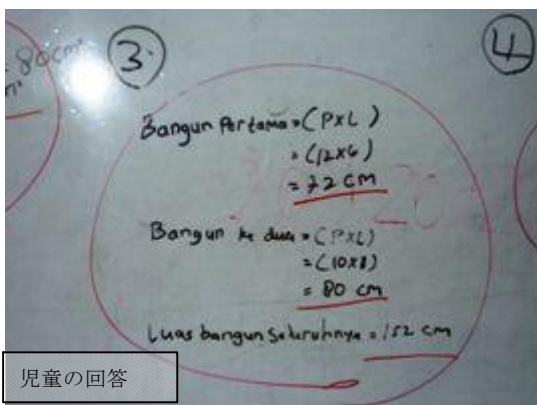


授業見学

2009年9月の企画では、ムハマディヤ小学校の先生自身が教育に関する課題を解決することが重要であるとこれまでの企画から判断したため、授業改善の一例として**授業研究**を知ってもらうことにした。方法としては1.授業研究の紹介、2.模擬授業の見



模擬授業



学、3.模擬授業に関する話し合い（授業研究）の3つを行った。

また、今後保護者というアクターにいか
にアプローチするべきか把握するため、各
家庭にインタビューに赴き、学校教育に対
する関心の度合い（個人面談にはどれくら
いの頻度で参加しているのか、など）、家庭
教育の内容（宿題のチェックなどをしてい
るのか否か）などを調査した。

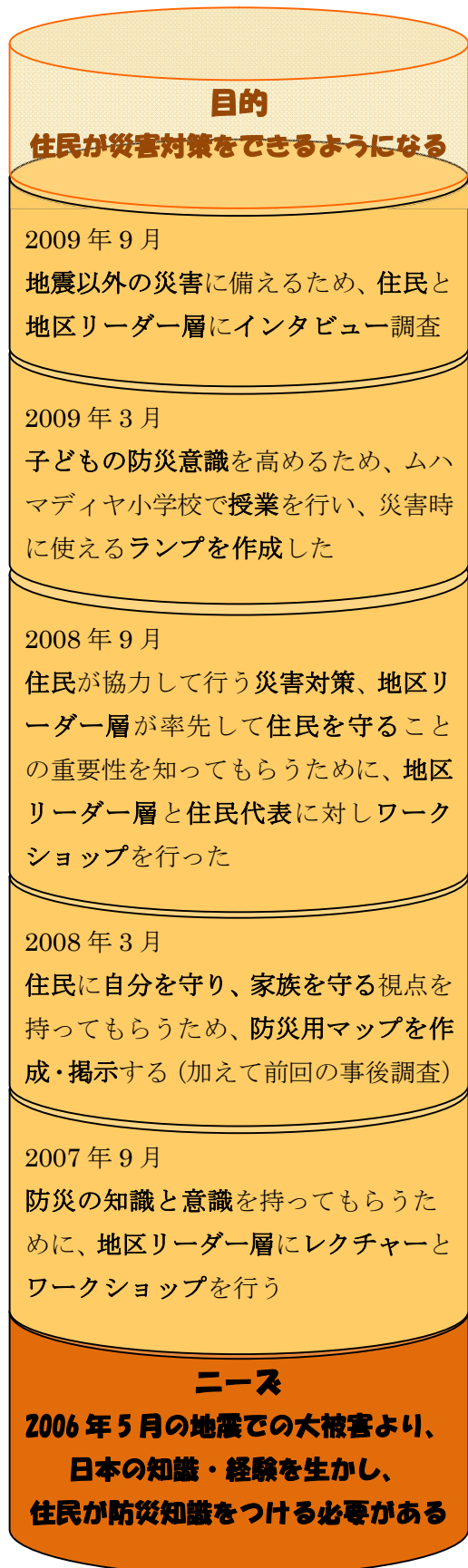


初回、2回目の企画では、企画準備の詰
めの甘さ、企画時間の配分、通訳をしてく
れる UGM との連携ミスなど、企画実施の
方法自体に関する反省が多く見受けられた
が、回を重ねるごとに文化の相違などに起
因する改善点が見えるようになった。企画
実施の問題点が上記のように移行してきた
のは、定期的活動の成果であり、先生にさ
まざまな教育手法を身につけてもらい「児
童によりよい教育を提供する」ための選択
肢の幅を広げてもらう第一歩を踏み出した
と考える（2009年3月における企画のフィ
ードバックで、先生から「CheRits がこれ
まで紹介した日本の授業手法は役に立っ
た」という主旨の発言を得た）。

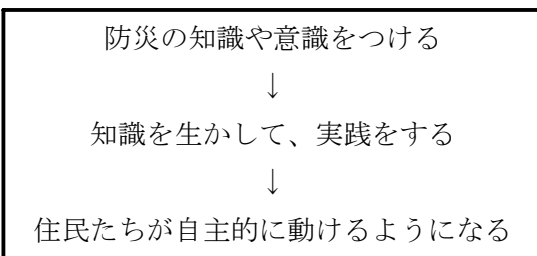
また、先生から「児童たちは UGM や
CheRits がくることを喜んでいる」といっ
た発言があり、われわれの活動が児童にと
っていい刺激となっているようである。



②防災の知識をつける企画



CheRits は「カラキジョ住民自身がコミュニティとして、カラキジョに適した災害対策ができるようになる」ことを目的にこの企画を行ってきた。この目的を達成するために、以下のようなプロセスを念頭に置いている。

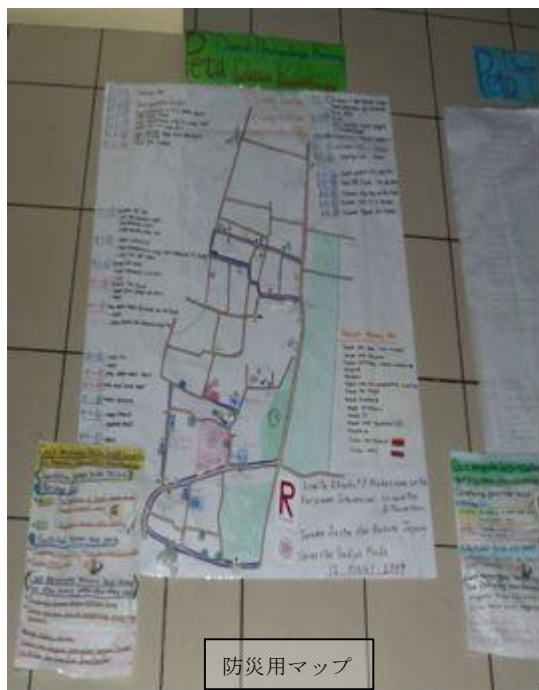


2006 年に起こったジャワ島中部地震によりカラキジョ地区での防災ニーズが高く、事前調査で防災の概念さえない人が多いことが判明した。よって **2007 年 9 月の企画** では、防災に関する知識と意識を持ってもらうため、地区リーダー層および婦人会（以下 PKK）リーダー、ムハマディヤ小学校の先生、宗教指導者に対し「地震発生メカニズムとインドネシアで地震が多い理由」などのレクチャーを行い、対象者ごとに分



かれ、カラキジョ地区での被害状況を振り返り、改善が必要な問題点を抽出し、自分たちの強みを生かした対策を考えてもらう話し合いを行った。また、各グループで出た意見を共有し、半年後の目標を設定してもらった。

2008年3月の企画では、地区での災害対策の前に、まずカラキジョの住民が自分や自分の家族を守るということを意識してもらうため、地区の白地図を作成し、地区リーダー層が知っている地域の情報（安全な場所・危険な場所・避難所など）を一緒に地区を歩いて教えてもらい、白地図に書き込むことで**防災用マップ**を作成した。計8



枚を作成し、これらをムハマディヤ小学校や地区リーダーの家、モスク（2つ）、集会所（4つ）に掲示した。また、前回の企画でどのような知識がついたのか、そのとき設定してもらった「半年後の目標」が達成されたのか、前回と同じ対象者に質問した。

2008年9月の企画では、地区リーダー層やPKKリーダー、ムハマディヤ小学校の先生、高学歴者を対象に、地区で協力して災害対策を行うこと、および彼らが防災リーダーとして地区の災害対策を率先して行うことの重要性を感じてもらうことにした。まず、もう一度前回作成した防災用マップ

を見てもらった。そして以下のような設問を与え、問題点と解決策を樹形図で考えてもらい、カラキジョ地区での**災害対策**を考えてもらった。

<設問>

あなたが自分の家にいる時に地震が発生しました。人々はどこへ逃げたいかわからずに混乱し、怪我をする人がいます。自身から一日が経ち、被害の状況が明らかになってきました。カラキジョ地区の中には、お腹を減らして、我慢している子どもがいます。この状況の問題点は何でしょうか？また、どんな対策が考えられますか？



2009年3月の企画では、新たに子どもにアプローチすることにした。ムハマディヤ小学校の児童に「インドネシアも日本も地震が多い国である」ということを話し、以下のようなグループワークを行った。その

A 火を消す B ドアを開ける C 机の下に隠れる D 正しい情報を得る E 協力して救出・救護 F サンドルをはく G 広い場所に逃げる と書いてある7枚のカードを、 a. 地震が発生し、揺れているとき b. 揺れがおさまった地震直後 c. 地震後や避難場所にいるとき の3つの場面のいずれですべき行動か判断し、あてはめてもらう	グループワーク 
---	--

後、正解を発表する際、児童になぜその行動をとらなくてはならないのか考えてもらい、解説をノートに書いてもらった。また、防災グッズを紹介し、カラキジョ地区でも使える**防災用ランプ**および説明書を児童と



作成し、地区住民に配布して回った。その道すがら、子どもの防災知識・関心・意識をはかるため、児童に質問をした。

2009年9月の企画では、インタビュー調査に重点をおいた。地区リーダー層に対し

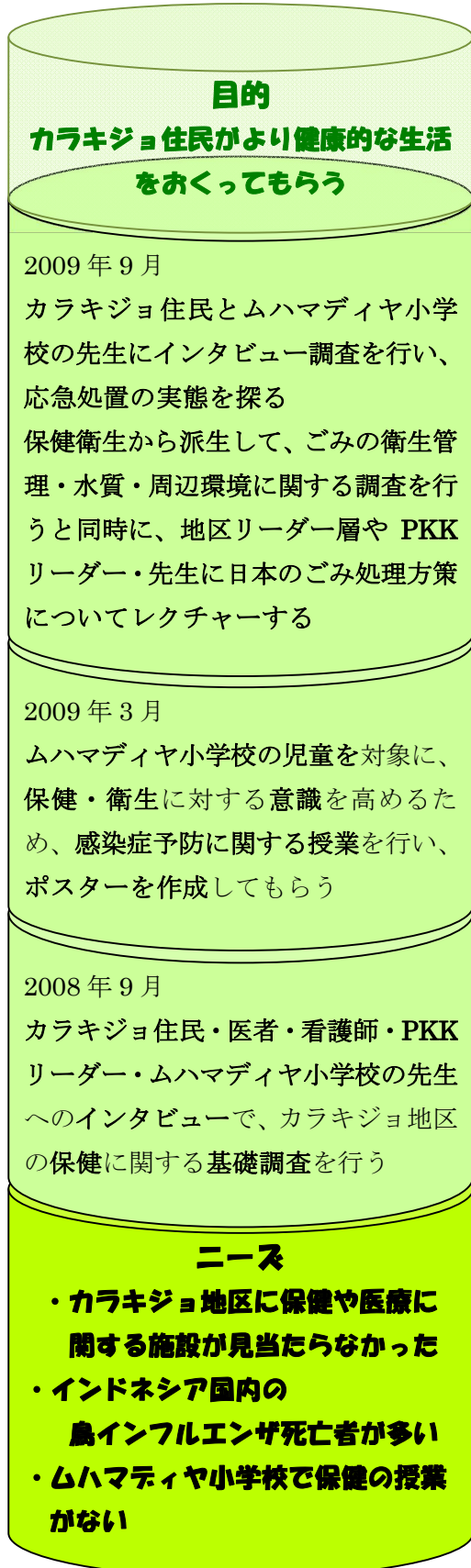


ては、今までの企画でどのように意識がかわり、どのような知識がついたのか、それが「実践をする段階」に移行するに足るものなのかを図ると同時に、地震以外の災害に対するCheRitsのアプローチの可能性を探るべく、カラキジョ地区でよく起こる災害やその被害について訊いた。また、住民に対しても、カラキジョ地区でよく起こる災害やその被害について訊いた。

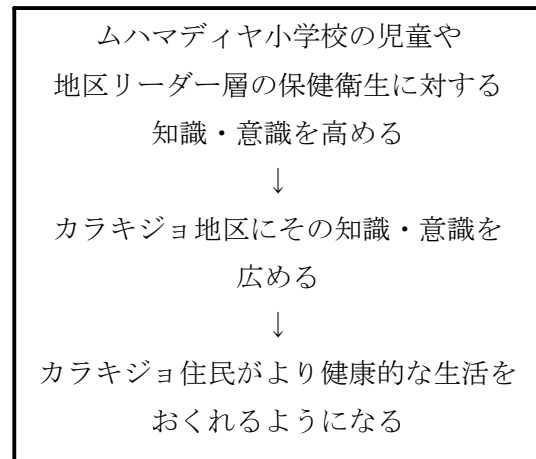
防災の知識をつける企画においては特に、地区リーダー層という影響力の大きい人々を対象とした企画だけに苦労も多かった。回を重ねるにつれ、生活スタイルや文化により適切な企画をするための改善点が挙げられるようになっている。企画の達成度としては、次に「知識を生かし、実践をする」段階に移行すべきか否かのところまで来ている（ムハマディヤ小学校の先生やPKKリーダーからは「シミュレーションをしてほしい」という要望が上がってきた）。

以前の地震から時間が経ってきたため地区リーダー層の意識が低下してきたようであったが、今回CheRitsが現地を離れた直後地震があったため、次回は新たな課題や要望をもとに、カラキジョ地区がよりよくなるための企画が提案できるだろう。

③保健衛生の知識をつける企画



CheRits は「カラキジョ住民がより健康的な生活をおくれるようになること、特に子どもが自身の保健に対する意識を高めること」を目的にこの企画を行ってきた。この目的を達成するために、以下のようなプロセスを念頭に置いている。



これまでの渡航企画の中で、カラキジョ地区内には主だった保健医療施設がなく、また学校で保健教育が行われていないことに気がついたこと、また 2008 年当時インドネシア保健省によると鳥インフルエンザ患者 135 名中 100 名が死亡していることを踏まえ、**2008 年 9 月の企画**より保健衛生の知識をつける企画を新たに設けることとした。初回ということもあり、まずは活動を行うための情報収集として、ムハマディヤ小学校の先生、PKK リーダー、医療従事者、カラキジョ地区住民に 1.学校での保健の取り組み、2.カラキジョの対策設備・アクセス、3.情報発信の有無と住民の情報理解、4.家庭における保健対策状況と病気、についてインタビュー調査をした。これにより問題点が以下の 4 つ発見された。1.学校での保健教育・保健管理が十分にできていない、2.親が子どもの健康管理を十分にできていない、3.地区内にゴミが多く、衛生上

好ましくない状態になっている、4.PKKや医療従事者らが伝えた、病気の予防方法がうまく伝わっていない。

2009年3月の企画では、前回のインタビュー調査でわかった問題点の1つ目（学校で保健教育・保健管理が十分にできていない）を受けて、ムハマディヤ学校の児童全員を対象に、感染症予防の重要性と知識を伝えることにした。

I（第一日目）：紙芝居レクチャー

児童に紙芝居を通して「風邪とインフルエンザはどのようにしてうつるのか、なぜうつるのか、うつったらどうすればいいか」を、インドネシア語でレクチャーした。



紙芝居



紙芝居見物

II（第一日目）：先生にプレゼンテーション

ムハマディヤ小学校の先生に「ムハマディヤ小学校で感染症予防を広げるために」と題したプレゼンテーションを行った。本の教育現場における事例やデータをまじえて、風邪・インフルエンザが学校で流行することの脅威、学校において集団で予防することの意義などを伝えた。



先生にプレゼンテーション

III（第二日目）：ポスター作成

1日目のレクチャーで伝えた5つの感染症の予防方法に関するポスターを全クラス全学年が作成した。5つの感染症予防方法とは、「石鹼を使って手洗いを十分にしよう」「うがいをしよう」「栄養のある食事をしよう」「睡眠を十分に摂ろう」「マスクを着用しよう」である。CheRitsが予め作成した、スローガンと絵が入ったポスター見本を提示し、児童はそれを参考にしながら、各自が描きたいスローガンと絵を選んで作成した。



感染症予防ポスター完成

このポスターは各学年の教室、学校の出入口の掲示板、地域の集会所など、住民の目に付きやすい場所に貼った。これは、注意を促す感染症予防のポスターを普段



うがいのポスター

から目にすることによって忘れないようにしてもらうためである。

IV（第二日目）：1週間キャンペーン

1週間キャンペーンとは、CheRits が作成したチェック表を使って1日目のレクチャーで伝えた予防方法「石鹼を使って手洗いを十分にしよう」と「うがいをしよう」の2項目を1人ひとりが実際に実行したかどうかを1週間の間チェックする取り組みである。学校で手洗い・うがいを習慣化させることがねらいであった。1日ごとに手洗い・うがいを実行できれば、クラスの一人ひとりの名前が入ったチェック表にシールを貼る。一覧表にすることによって、子どもどうしが競い合って実践する工夫をした。



V（第二日目）：保健委員選出

1週間キャンペーンを子ども自身が実践するには、クラスを先導するリーダーが必要であると考え、「保健委員」を各クラス2名選出させた。これについては、「先生へのプレゼンテーション（Ⅱ）」のなかで、先生に許可を得た上でのことである。

保健委員の役割は、手洗い・うがいの呼びかけやチェック表の管理、ポスターの掲示板への貼り付けを行うことである。また1週間キャンペーンが終わった後も保健委

員が率先して保健意識向上のために活動を続けてほしいというねらいもあった。



VI（第二日目）：保健委員への指導

保健委員に選出された（自薦）児童には、放課後に教室に集まってもらい作業の再確認をした。また、チェック表にクラス全員の名前を記入させ、全員のポスターを掲示板に貼る作業など、保健委員としての意識を高めるねらいがあった。



これらの取り組みにより、UGM メンバーからの「レクチャー時の子どもの反応が概ね良好であった」という発言より、子どもの感染症予防に対する知識が全体的に向上したと考える。また、先生へのプレゼンテーションの際に、多数の質問が先生から寄せられ、積極性が見られたため、先生の感染症予防に対する意識が向上したとも考える。

2009年9月の企画では、2008年9月のインタビューでわかった問題点の2つ目（親が子どもの健康管理を十分にできていない）と3つ目（地区内にごみが多く、衛生上好ましくない状態になっている）を受けて、家庭での応急処置についてのインタビュー、ごみ処理方策レクチャーや環境調査（以下、環境企画）を行った。

I：インタビュー調査

子どもがけがをしたとき、家庭ではどのような応急処置がされており、どのようなけがは処置されないのか、各家庭を回ってインタビュー調査を行った。インドネシア独自の伝統療法や使用する薬の内容などが把握できた。



加えて、先生にもインタビューを行い、学校で子どもがけがをした場合どのような応急処置をするのか、また保健室の使用状況について、前回の「感染症予防」企画で教えた手洗い・うがいが継続されているか、保健委員は継続しているかについて把握した。



前回の企画で作成した「感染症予防ポスター」は現在も各教室およびムハマディヤ小学校のエントランスに掲示されている。



II：環境企画

この中で、a.日本のごみ処理方策レクチャー、b.基礎環境調査、c.地区リーダー層へのインタビュー、d.水質調査、e.コンポスト調査の5つを行った。

a.日本のごみ方策レクチャー

前回の渡航の際に、「日本のごみ処理方法について知りたい」との要望があったことから、今回地区リーダー層、先生、PKKリーダーに紹介することにした。主な内容は、行政によるゴミ回収、種類別ごみ処理の方法、日本のごみ処理の問題点、3Rについて、コンポストの紹介などである。レクチャー

前に現在のごみ処理方法について、後にレクチャーの感想および参考にできそうな点について、アンケート調査を行った。⁴



b. 基礎環境調査



2008年3月の防災の知識をつける企画において作成した防災用マップの白地図をもとに、カラキジョ地区を歩き、ごみの捨て方、地区に生

⁴地区リーダーの都合により、急遽、先生・PKKリーダー（昼）と地区リーダー（夜）の2回レクチャーを行った。また、昼のレクチャーの際にJogjaTV（地方放送局）の取材に応じ、レクチャーの抜粋が放送された。

える植物の種類など、地区全体の様子を把握することにした。UGMの学生にも一緒に歩いてもらい、植物の名称などを教えてもらった。

c.地区リーダー層へのインタビュー

地区リーダーの家にお邪魔し、家庭のごみ処理方法、資源ごみの回収実態、自家焼却の位置と頻度などを知るために、日本のごみ処理方策レクチャーにおけるアンケートをもとに、インタビューに応じてもらった。



d.水質調査

インドネシアで問題となっているデング熱を媒介する蚊が繁殖するのは水の中であるため、カラキジョ地区の水質をバックテストにより調査することにした。調査対象は他地区とつながっている用水路、モスクの井戸、ムハマディヤ小学校の井戸、個人宅の井戸（住民は井戸水を生活水として使用するため）である。



e.コンポスト調査

日本のごみ処理方策を紹介したレクチャーでコンポストを紹介したが、カラキジョ地区でコンポストをすることが可能かどうか住民の家に赴きインタビューした。コンポストをすでに行っている場合はその実態について調査することにした。



ほかの企画より遅く始まった企画ではあるが、地区リーダー層から「今後も保健衛生に関する活動を続けてほしい」とわれわれの活動を容認してくださっている発言があった。今後期待に沿って活動をつづけるために、文化の相違に気を配り、適切な対応をすることが必要であることを、この企画においても痛感している。というのも、CheRits が提案した感染症予防のための手洗い・うがいが、イスラーム教のお祈りの際にする儀礼的な手洗いと同一視されてしまい、衛生面における手洗い・うがいの必要性を理解してもらうのに時間がかかったという事実があるからである。

今回派生して行った環境企画において、衛生的にも景観的にも道端のごみ（ポイ捨ても含め）が問題視された。また、日本のような整備された行政ごみ回収のないカラキジョの住民は、各家庭でのごみ処理においてさまざまな問題を抱えていることもわかり、アプローチの幅が広がった。

6. 活動報告（国内）

CheRits の活動は、インドネシアでの活動では完結しない。インドネシアでの活動はカラキジョ地区をよりよい社会にするための活動であるが、国内企画は、異文化の存在・異なる生活スタイルの紹介を日本人に向けて行うことで、日本人の視野を広げると同時に、国際協力に興味を持ってもらうことを目的としている。インドネシアの活動成果をもとにして、京都市内の小中学校における国際理解教育の実施、学内写真展の開催、また毎年大阪で開催される国際協力・交流イベント「One World Festival」への出展およびシンポジウム開催等をおこなってきた。メディアを通じて社会に発信



もおこなっている。防災活動の取り組みが評価された

「ぼうさい甲子園」奨励賞受賞の記事が2008年12月17日、2009年1月12日（毎日新聞京都面）に掲載されたこともその一環である。

また、昨年度から今年度夏にかけて、中国・四川大地震およびミャンマー・サイクロン被害に対する支援活動を新たな取り組みとして始め、募金活動への参加やチャリティーイベントへの参加・開催なども行っている。



学食チャリティーイベント

7. 今後の展望

CheRits の活動は 2009 年 9 月の渡航で 8 回目を迎えた。回を重ねるにつれて、UGM との円滑な連携、効率的・効果的な企画のあり方など、基本的な企画運営を学んできた。同時に、イスラーム教に根ざした、しかし仏教やヒンズー教、キリスト教も信仰されている、インドネシア独特の生活習慣や文化を体感するにつれ、カラキジョ地区住民の生活の支障にならないような活動も心がけられるようになった。8 回にわたる渡航の間に蓄積してきた情報・資源を継承していくことで、より**地域のニーズに根ざした、継続的にかつ対象者の利益となる有意義な企画実施に努めていく。**

ニーズに関して言及しておく、現在は**顕在化しているニーズ**にアプローチする傾向が強いが、本当によりよい社会を実現するためには**潜在的なニーズ**を発掘し、顕在化することも重要であると考え。定期的な渡航と企画ごとのフィードバックおよび考察を通して、CheRits は潜在的ニーズにも気づきつつある。

また、**活動初期に比べ、求められる専門性も高くなっている。**CheRits が日常において専門性を高める努力をするとともに、専門家の意見やアドバイスを今まで以上に得ることで、有意義な企画を実施しようと考えている。

このように継続的にかつ対象者の利益となる有意義な活動の実施のためには、団体内において過去の情報や資源の継承、対象地域における課題やニーズの正確な把握、および活動の専門性を高める努力が今まで以上に必要である。

8. まとめ～「外部者」の役割

CheRits は設立当初より、海外の対象地域の小学校を拠点として教育をその軸にソフト面での活動を行ってきた。対象地域における「よりよい教育」を目指した活動は先生の授業手法の幅を広げることから教育の質向上へとつなげようとするものである。また、児童を対象に防災・保健教育を実施することも教育の質向上というねらいがある。その授業の中で、防災や保健の意識・知識の定着とともに、教育の側面から、現地の教師に授業モデルとなるような工夫を講じたのである。

ただし、私たちが単に日本の事例を紹介すればよいというものではない。現地の住民や教師が自らの手で現地に即したものにアレンジし、実践していく契機となることが、「**外部者としての私たち**」の本来の国際協力のあり方ではないかと考えている。

その点で、私たちは、同じ地区に何度も訪問するものの、現地の方々の自発性を促すことの難しさを認識せざるをえない。その原因としては、日本とインドネシアという文化や状況の違い、教師のモチベーションや問題解決への姿勢などが考えられるだろう。これらの課題をクリアするために私たちはこれまでも現地の状況、カリキュラム、教師の時間的なキャパシティを考慮して活動を行ってきた。そのためには事前の情報収集による状況・ニーズの把握が肝要である。そうしなければ一方的に価値観を押し付けることになりかねないからである。

今回の教育の質向上企画はムハマディヤ小学校の教師自身が教育に関する課題を解決することが重要であるとし、問題解決の

ひとつの手段として「授業研究」を体験してもらおうというものであった。そこでも大きな障壁となったのが国による違いである。例えば、日本の教育現場では、児童に問題を提示したとき、答えまでの道筋を隠してまずは児童に考えさせるプロセスを経る。他方インドネシアでは、答えの道筋（公式など）を冒頭に明示した上で授業をおこなうのが一般的であるという。これ以外にも、先生が教職以外に副業をせざるを得ない状況、教材の不足、カリキュラムの規定などの問題が常にある。ましてや、「授業研究」のように、教師間で互いが「評価しあう」というきわめて教育文化や価値観に関わる課題は、現地の教師がただちに共感することは難しいであろう。

しかし、それでも「教師のモチベーションを向上させて欲しい」という現地住民・保護者のニーズや、教師自身の教育力向上への関心がうかがわれることもまた事実である。当然のことであるが、教師の業務規定やカリキュラム、教育現場における物質的状況を学生団体が変えることは非現実的である。

わたしたちが出来ることは、それらを変化させるのではなく、現在ある状況の中で現地の教師あるいは住民が自分自身の新たな可能性を見つける「きっかけ」を作り出す、あるいは「気づき」を促すことが重要であると考えている。また、これまでは児童の選択肢の幅を広げるために、教師へアプローチをしてきたが、今後は児童と深く関わる存在として新たに保護者の重要性や、家庭教育の可能性も考慮に入れるべきであろう。